

目で見て肌で感じる

= 福島キャラバンに参加して =

3月4日から3月7日の日程で福島連帯キャラバンに参加してきました。

福島の現状を自分の目で見る事大切さを改めて実感しました。

東日本大震災と福島原発第1事故から15年の年月が経っていますが、被災地ではまだまだ復興の途中で、震災の影響が続いています。

実際にフィールドワークを行い震災の被害の受けた地域を見ることでニュースやインターネットの情報だけでは分からない現実を知る事ができました。



▲東日本大震災・原子力災害伝承館

現地の風景や現状を目で見て肌で感じる事で、震災の大きさや原発事故の怖さを知りました。また、現地でお話を聞く中で、避難生活の苦労や地域を再生する努力、そして震災を決して風化させてはいけないという強い思いを感じました。

要請行動では各自治体に要請文を提出し、各自治体に質問をしました。真摯に対応してくれる自治体もあれば不誠実に対応してくる自治体もありました。

最終日の代々木公園の全国集会では、多くの人に参加しており、

原発ゼロの思いを共有し声を上げる事で、福島の人たちを支えるだけでなく、自分自身が社会問題について考えるきっかけにもなりました。

今回キャラバンに参加して震災や原発事故を過去の出来事として風化させるのではなく今も続いて



いる問題として向き合う大切さを学びました。

今後の活動に活かせるように頑張っていきます。

(青年部部长 船津 泰和)

青年対策交流集会

2月21日～23日にシーパレス豊橋で開催された第26回青年対策交流集会に参加してきました。

私は2回目の参加でした。初日は松永書記長による講義で、内容は、「36協定、産別協定について」でした。講義の後、分散会にてグループ討議を行いました。各支部の方々とは色々な意見を交換し、貴重な時間でした。

2日目は、千葉中央執行委員の「災害時における港湾従事者について」の講義がありました。実際の港の被災した写真などを見せて

いただきました。

午後は、毎年恒例のドッチボール大会があり、とても盛り上がりました。

2日間とも夜は懇親会があり、横の繋がりを大事にしたい思いから飲み過ぎた面もありましたが、有意義な取り組みでした。各地方に顔なじみもできて、参加できてよかったと思います。

これからの組合活動も、この2日間の経験を活かして、頑張っていきたいと思います。

(青年部副部长 稲葉 拓磨)



だんけつ

第401号 2026年4月6日



発行
大阪市港区築港1-12-27
全日本港湾労働組合関西地方大阪支部
発行責任者 陣内恒治



3月1日、大阪第2港湾労働者福祉センター前において参加者200名で「26春闘決起集会」を開催した。集会の冒頭、小林委員長は、物価高騰の長期化で日常生活の負担が増している中、26春闘の闘う方針を掲げた。また、緊迫する中東情勢や国内の軍事強化の動きに強く警鐘を鳴らした。

「平和なくして労働運動なし、労働組合運動の根本にある平和を守る」と言葉を強めた。



関西地方本部の樋口書記長は、2月に日本港運協会へ提出した要求について、大幅賃上げ・労働時間の短縮、そして政府による港湾合理化の阻止を大きな柱とし、特に深刻な問題として、第2福祉センターが3月末をもって廃止・売却されようとしている現状を挙げ、「日本の輸入燃料の97%を港湾

労働者が扱っている。その施設が政府によって淘汰され、軍事施設に転用も懸念されるような政治が動いている。これをどう止めるのか、我々労働者にかかっている」と、働く者の拠点を守るための団結を訴えた。



連帯挨拶では、各団体から力強いメッセージが寄せられた。全日建関西地区生コン支部の細野書記長は、労働組合が立ち上がらなければ日本が戦争に突き進んでしまうという危機感として、政府がイランを批判する一方でアメリカへの非難を一切口にしない現状を指摘した。春闘については、4月から生コン価格が大幅に値上げされることを受け、「年収にしたら本勤といわれる正社員は1,000万出しても会社は利益が取れる、そ

ういう情勢です。日雇いであっても1日3万4千円出しても釣りが来るんです」と述べ、企業利益を労働者に還元させる反転攻勢の闘いを進めることを宣言した。大阪全労協の友信事務局長は、「スト権も確立せず、使用者側にお情けで給料を上げてくださいと言っているような組合とは一線を画す」と真の労働運動の姿を強調した。

社民党の西尾圭吾氏は、「高市首相の施政方針に、働く人、生活する人の姿が見えてこない」と断じ、ホルムズ海峡封鎖の危機が日本の存立危機事態に直結し、国民が戦争に駆り出されるリスクを訴えた。



集会終了後、青年部が洗頭にシュプレヒコールを強くアピールし大正駅までデモ行進した。

(副委員長 陣内 恒治)